

## 紆余曲折も、今は思い出

2日間、全国重症心身障害児（者）を守る会東北ブロック大会・研修会（参加者 200 名弱）に出席した。この会とおつき合いもかれこれ 30 数年になる。当時、全国重症児を守る会の県支部は、東北には 2 県しかなく、重症児の親の会の東北全体としての活動としては、東北管内 12ヶ所の国立療養所の各重症児施設の親の会の連合会であった。

毎年全国重症児を守る会全国大会に顔を出していたよしみからか、数年して全国重症児を守る会・会長から、僕に連合会の親の全国重症児を守る会への参加への働きかけを打診された。早速、各施設の指導員へ働きかけた。また、ある一部の親は、全国重症児を守る会の活動に共鳴し、周りの親へ働きかけを行っていた一部の親を励ましもした。この間、紆余曲折があった。しかし、次第に共鳴する親も増え、各県に全国重症児を守る会・県支部が出来、その活動組織として、東北ブロック、その中に国立療養所部会として位置づけられ、連合会は発展的に解消した。

今回は第 7 回東北ブロック大会であったが、全国重症児を守る会の各ブロックでも初めての、東北各県の障害福祉課長等の参加による「東北圏域における障害者保険福祉施策の展望」をテーマにしたセッションが開かれるまでに成長・発展したことに、僕としては感慨深いものがあった。懇親会では、紆余曲折時代に、互いに連絡励まし合った親とも再会でき、思い出に花も咲いた。

支援費制度の開始、来年からの国立療養所の独立行政法人化、地域生活重点への福祉施策の変化、等々、親も益々重症児の代弁者として取り組む問題は、山積みである。福祉施策の多様化、権利意識の増大等で、若い親の参加減少という各県共通の悩みもあるようである。

私は今回、「在宅部会」の助言者であったが、その中で「ひとりも もれなく」の理念を決して忘れることなく、若い親が先輩の親が辿った同様の辛苦をしていることに寄りそう姿勢・方策こそが大切であり、その係わり合いが必然的に若い親の参加に繋がるのではないかとアドバイスした。組織が大きくなると、その維持に頭が行きがちであるが、大事なことは、一人一人を大事に考え、それに向き合うことこそが、全国重症児を守る会の活動であり、その精神こそが福祉と思い、これからも係わり続けてたい。

（2003 年 09 月 07 日記）